

説である。漱石は自分の今までの人生経験、生活上で感得したものを、心理分析、性格解剖、昔への回想などの手法で、この彼の最後の完成作を書き上げている。この作品の中で、漱石は夫婦、親類、養父母、自分の事などの描写を通して、自分のその時点の夫婦観、社会観、自己認識を表明した。そして、初めて、作品の主人公の身を社会環境の中に置いて、その思想発展を、社会と緊密に結びつけて、それを、その時代の社会的な産物として描写した唯一の作品である。だから、『道草』は漱石の創作の記念碑的な作品だと言える。此度、『道草』論を通じて、漱石の夫婦観、社会観、自己認識の到達点を探索してみたいと思う。

宮本百合子『心の河』に見られる夫婦間の問題について

——妻さよの視点から——

博士前期課程 二年 熊倉 百合子

『心の河』は、大正十三年の「改造」6月号に発表された作品である。百合子は『心の河』に於いて夫婦間の問題をとりあげ、妻の視点から夫とのくいちがいを描き出している。これは後の、同年9月号に発表されている『伸子』の夫婦間の問題とも似通っており、発表雑誌も同じことから、『伸子』の前段階の作品であると言える。

本発表では、小説のわりにさよが「つばやく」「この永い、重い、苦しい夜は本当に明日あけるのだろうか……」という言葉に注目し、『心の河』で描かれている主人公さよを通して、さよと夫保夫とのすれ違いの過程を考察していきたい。

《中国学》

杜牧と河東裴氏との関係について

博士前期課程 二年 坂野 純子

唐の杜牧は詩人として名を知られているが、一方、士大夫として政治に強い関心を持ち、また自らの「家」の伝統を重んじた誇り高い人物でもあった。

杜牧のこのような性質については、彼の祖父である杜佑の影響が大きいということが常に指摘されている。また杜牧の作品中にも杜佑について触れたものがあり、彼が三代の皇帝に宰相として仕えた祖父を意識していたことは明らかであろう。しかし、杜牧の思想の基盤となっていたのは、祖父の存在だけではなかった。

本発表では、従来あまり論じられることのなかった当時の名門貴族である河東の裴氏と杜牧とのつながりに着目し、周囲の環境や人間関係が彼の人格形成に与えた影響について考えてみようと思う。

一休『狂雲集』における「春」について

博士前期課程 二年 川出 深雪

禅の高僧の研究において、一等資料となるのは『語録』である。しかし、一休宗純（一三九四～一四八一）にはそれが無く、かわって最も有効な資料とされるのが、一休一代の別集『狂雲集』である。いま、いわゆる『狂雲集』として一括されるものに現存する漢詩、

総数およそ一〇六〇首。それは更に「狂雲集」と「続狂雲集（狂雲詩集）」にわけられ、その内容から、前者が頌偈の集であり、後者が詩の集であるとされる。

今回の発表では、特に頌偈集である「狂雲集」を取り上げ、一休の春の詩について、考えていくこととする。その際、「梅」や「桃」といった花に関する語に注目し、それらの語を、詩語・禅語の両面から併せみていくこととしたい。

「狂雲集」には「春」の詩が数多くみられるが、一休にとっての「春」とはどのようなものであったのか、また一休における春と禅との関わりについて、考えてみたいと思う。

老舎文学の一特徴

——饒舌について——

博士後期課程 一年 緒方 昭

老舎は「語言大師」と言われるほどに、言葉を大切に作る作家である。それと同時に、極めて饒舌な話術の持主でもある。そのため、作品の構成が散漫、饒舌に流れ、問題の追求が甘くなるという指摘もあるが、実はその散漫と言われ、饒舌と言われるその点こそが、老舎文学の特性であり、大衆文学として成立させる重要な因素である。

その饒舌な話の展開は、小説が語り物であった時代に流行した講釈師の語り口に一脈通じるものがあると思われる。それは、話の流れを縦横無尽に展開させ、時には本題から逸脱させて、読者を話の

世界へ引き込んで行く手法である。読者はそういう身近かな世間話的な魅力をこよなく愛して老舎小説の虜となってしまうのである。それは老舎が、大衆を読み手として深く意識した創作態度であり、極めて積極的な文学営為であると評価すべきであろう。

今回の発表では、『駱駝祥子』、『正紅旗下』の小説二編に基づいて、その語りの特徴をさぐり、作者が求めた、読み手を意識した小説手法を考察してみたい。